



第30回ATP賞
総務大臣賞 審査委員長 鈴木 嘉一
(放送評論家・ジャーナリスト)

ATP賞が今回で第30回を迎える。読売新聞記者時代から総務大臣賞の前身である郵政大臣賞の審査を依頼され、2001年に新設された「テレビ記者賞」にもかかわってきた。それだけに、ATP賞が大きな節目を迎えたことは、個人的にも感慨深い。賞は続けてこそ意味があり、歴代の受賞作や受賞者たちのその後の活躍が賞の価値を大きくさせるからである。実際、ATP賞は今や放送界の主要な賞の一つとして定着している。

官民挙げてテレビ番組やゲームソフト、アニメーション、映画、音楽などのコンテンツの国際展開に力を入れるようになってからは、総務大臣賞の審査基準に「海外にも通用する普遍性と商業性」という要素が加味された。審査会では、作品のクオリティとそうした国際性のバランスが重要なポイントになり、どちらに軸足を置いて評価するかは審査員の立場や視点によって異なる。

今回、ATP賞のドラマ、ドキュメンタリー、情報・バラエティの各部門から選ばれた候補作は6本で、前年より2本少なかった。まず、5人の審査委員がイチオシの作品と次点の作品を投票したところ、イチオシの票が4作に分散した。1作ごとに議論を重ねた結果、フジテレビで2013年4月から6月まで放送された連続ドラマ「家族ゲーム」(製作・共同テレビ)と、NHKのBSプライムで2月に放送された2時間のドキュメンタリー「密着! 秋元康2160時間〜エンターテインメントは眠らない〜」(製作・NHKエンタープライズ)の2作に絞られた。最終投票に持ち込まれ、「家族ゲーム」が満票で総務大臣賞に決まった。

個々の作品に対する評価や意見をおとして、「グローバル時代に求められるテレビ番組とは何か」をめぐる論議を紹介したい。

「家族ゲーム」は松田優作が主演した森田芳光監督の映画で名高く、これまでにテレビドラマ化もされた。「平成版」のこの作品では、好青年のイメージが強かった櫻井翔が明るい不気味さを漂わせる主人公を好演し、新境地を開いた。主人公が家庭教師として通う家は、中学校でいじめられ、自室に引きこもる二男を除くと、大手企業に勤める父親と美人の母親、勉強もスポーツもできる高校生の長男たちは、何の問題も抱えていないように見えた。しかし、常軌を逸した主人公の介入によって、家族一人ひとりの不満や鬱屈、傷口があらわになる。一家は家庭崩壊という荒療治を経て、再生への一歩を踏み出す。

このドラマ自体は「ヒット作のリメイクではあるが、今目的な家族の崩壊・再生劇としてオリジナリティは高い。主人公の過去

に何があったのか最後まで引きつけられ、エンターテインメントとしての力もある」と支持を集めた。ただし、国際展開を考えた場合、「暴力的なシーンなどが多く、ダークな印象を与える。こうした毒、が海外に受け入れられるだろうか」「受験競争やいじめの問題などは東アジアにも共通する同時代的な題材であり、共感される素地はある」と見方が分かれた。

「密着! 秋元康2160時間」は、人気絶頂のアイドルグループ「AKB48」をはじめ、ジャカルタや上海にも姉妹グループを誕生させている秋元を3か月間にわたり密着取材した。プロデューサー、作詞家、放送作家などの多彩な顔を持つヒットメーカーの多忙な日々をおとして、一切の妥協を許さない姿勢、秋元流エンターテインメントの方法論を浮かび上がらせる。

しかし、「秋元さんの個性に寄りかかり過ぎて、ドキュメンタリーとしては弱い」という意見が多く、「秋元さんが『クール・ジャパン』を代表する一人なのは間違いない」「日本のアイドル文化は『かわいい』という少女性に価値を見だし、欧米の女性観とは異なる。その仕掛人の素顔や戦略はアジアの人々にも関心を持たれるだろう」という肯定論を退けた。

BSHテレの「檀れい 名匠の里紀行」で2月に放送された「大阪・堺 極上の包丁とハサミ」については、「伝統的な職人の技に光を当てており、海外に売れる可能性がある」と評価されながらも、応募の仕方が論議を呼んだ。「国際市場を想定するなら、この回だけではなく、番組全体として応募され、評価されるべきだ」という意見で一致し、シリーズものの応募方法についてATP側に改めて検討を促した。

BSフジの「古代紀行ドキュメンタリー『古事記の世界』〜CGアニメで紐解く日本誕生物語〜」も、第一話「『国生み』〜こうして日本は誕生した〜」が応募された。「漢字の説明が多く、外国人には難しすぎる」との声が多数を占めた。中部日本放送などで放送された単発ドキュメンタリー「『さいかい』〜東日本大震災、その時ペットは〜」と、NHKの「ドラマ10」で放送された「いつか陽のあたる場所で」には、弱点の指摘や注目が相次いだ。

前回に続いて担当したある審査委員は「今回は全体にレベルが低い。応募や1次審査の段階で『海外に売れるかどうか』を強く意識しすぎるのではないか」という感想を漏らした。海外にも視野を広げて作るのは時宜にかなっているが、国際共同制作ならいざ知らず、海外向けの番組作りが自己目的化したら、日本のテレビ番組としては本末転倒だろう。

「第30回ATP賞」総務大臣賞 審査委員

- ◆審査委員長 鈴木 嘉一(放送評論家・ジャーナリスト)
 - ◇審査委員 天城 鞆彦(Tokyo Docs 実行委員会 委員長) 大山 勝美(カズモ代表取締役社長)
 - 中町 綾子(日本大学芸術学部 教授) 宮崎 美紀子(東京中日スポーツ新聞 記者)
- (敬称略、五十音順)

第30回 ATP賞

2013

一般社団法人 全日本テレビ番組製作社連盟

発行/(一社)ATP 〒105-0001 東京都港区虎ノ門2-9-8 あまかすビル6F TEL.03(6205)7858 FAX.03(6205)7859

「第30回ATP賞」受賞式典が12月4日(水)六本木ハリウッドホール(港区六本木)にて開催されました。

式典冒頭、藤川政人総務大臣政務官、松本正之NHK会長、早河洋民放連副会長、迫本淳一コ・フェスタ実行副委員長のご祝辞に続き、倉内均ATP理事長の開会宣言にて式典が開会となりました。

今年度の応募総数は、過去最多の166本(新人賞の応募11を含む)。栄えあるグランプリは、大接戦の末ATP会員社、審査委員の投じた100票のうち38票を獲得したドキュメンタリー部門「零戦」~搭乗員たちが見つめた太平洋戦争~(NHKエンタープライズ、かわうそ商会/NHK BSプレミアム)に輝きました。当日は、年末のご多忙の中550名の関係者の皆様にご列席頂きました事を心より御礼申し上げます。



松丸友紀(テレビ東京) アナウンサー 中村慶子(NHK) アナウンサー

グランプリ 「零戦」~搭乗員たちが見つめた太平洋戦争~



●出演者 染谷 将太 小林 ユウキチ 斎藤 歩 奥田 瑛二 古舘 寛治 松本 花奈 山下 容莉枝

●ナレーター

中條 誠子

●スタッフ

制作統括:堤 啓介 伊藤 純 千葉 聡史 演出:正岡 裕之 ディレクター:大島 隆之 遠藤 俊太郎 取材:藤岡 ひかり 松倉 大夏 藤川 佳三
プロデューサー:小林 ひろ子 音効:河原 久美子 編集:太田 一生 佐藤 公二 影山 正美 映像技術:田辺 公一 小笹 隆之
音声:永峯 康弘 鈴木 研二 小川 一登 照明:高坂 俊秀 ロケCAM:金沢 裕司 水野 宏重 リサーチ:柳原 緑
制作協力:かわうそ商会 制作:NHKエンタープライズ 製作著作:NHK

グランプリ



「零戦」
～搭乗員たちが見つめた太平洋戦争～
ディレクター 大島 隆之
(NHKエンタープライズ)

今回はこのような賞をいただき、ありがとうございます。証言とドキュメンタリードラマを軸にした3時間の大型戦争番組は、2012年のATP優秀賞をいただいた「巨大戦艦 大和」に続いて2作目になるのですが、その間一緒に試行錯誤を繰り返してきた多くのスタッフを代表して、感謝申し上げます。

今回の番組は、2013年、宮崎駿のアニメ「風立ちぬ」、百田尚樹の小説「永遠の0」がともに劇場公開され、零戦への関心が高まると予想されるなか、年初から進められた企画です。その際に大きな力となったのが、フリーのテレビカメラマンである金沢裕司さんと一緒に撮りためてきた、200時間におよぶ元搭乗員のインタビューでした。なぜなら、2013年のはじめの時点で、番組に登場する証言者のなかには、亡くられたり、体調を崩されている方が多くいたからです。

僕が零戦の元搭乗員の取材を始めたのは、今から7年前、2007年のことでした。「なぜこのようなインタビューを続けてきたのか」とよく聞かれるのですが、理由は単純で、「小さい頃から零戦に心惹かれていたから」です。取材を始めた当時、「零戦」は日本人が大切に語り継いでいかなければならないテーマであるにも関わらず、薄れゆく戦争の記憶となって久しく、社会的にもほとんど関心を持たれていませんでした。また、NHKを始め様々な局が零戦の番組を作ってきましたが、彼らの言葉を構成の一部として利用することはあっても、彼らの言葉が主役になるような番組はなく、元搭乗員たちの真情をどこまできちんと伝えているのか腑に落ちないことも多々ありました。彼らの声が聞けなくなる前に、その言葉に一から向き合わなければいけないんじゃないか。僕と金沢さんはそう意気投合し、インタビュー行脚を始める

ことにしたのですが、全国各地に元搭乗員を訪ねては、お話を伺う数時間が、毎回、僕たちにとっては至福の時でした。また、目の前の具体的な番組に追われてのインタビューでないからこそ聞きたいことを真剣勝負で心ゆくまで聞くことができ、彼らの真情により迫ることができたのではと思います。

とは言っても、どのような形で番組に纏めることができるのか、目処をつけられないまま走り始めてしまったので、「元搭乗員の方々のご好意が、無駄になってしまうかもしれない」という不安もまた大きなものでした。そうしたなか取材を全うすることができたのは、「必ず貴重な記録となるから」と僕たちを励まし続けてくださった、フォトジャーナリストの神立尚紀さん、元搭乗員が集う「NPO法人零戦の会」はじめ、多くの方々のお陰です。この場を借りて、厚く御礼を申し上げます。

2013年、突如零戦熱が湧きあがったように、近い将来、この熱は再び急速に冷めて行くのかもしれませんが。そうした時代の流れに抗うべく、今回の受賞を励みにしつつ、引き続きドキュメンタリーの果たすべき役割を模索していきたいと思っています。



最優秀賞

ドラマ部門

水曜ドラマ『Woman』
～命をかけて我が子を育てるシングルマザー～



ケイファクトリー／日本テレビ
演 出 水田 伸生(日本テレビ)
プロデューサー 次屋 尚(日本テレビ)
千葉 行利(ケイファクトリー)
大塚 英治(ケイファクトリー)
坂元 裕二
脚 本

プロデューサー 千葉 行利(ケイファクトリー)

同業者の選考、という、ATPの最優秀賞を頂けたことは、この上ない喜びです。近年、原作モノの作品がテレビドラマ界の主流になるなか、オリジナル作品としてこのような高い評価を得られたことにも深い感慨を覚えます。この作品が成就する過程は決して平板ではありませんでした。一体、どれほどのクオリティを目指すのか?感性の高い人間が集まると、そのハードルは必然として際限なく上がっていきます。人の心を抉り出す刃のような坂元裕二氏の脚本を、演出の水田伸生氏が絶妙に切り取り、主演の満島ひかりさん、田中裕子さん、小林薫さん、をはじめとする出演者が、鬼気迫る演技でそれを見事に乗り越えていく。その空気感は寒気がするほどでした。当然スタッフは東の間も気を抜くことが許されません。受賞の喜びを噛みしめる今になって、やっと確信しています。すべてのスタッフ、キャストが日々もがき苦しんだその結果が、本気のドラマとして視聴者の心を揺さぶったのだと。このような作り手冥利に尽きる座組みが、今後そう簡単に成立するとは思えないのですが、「Woman」は、我々の次なる高い目標としてずっと聳え立っていることでしょう。誠意ある審査にご尽力なされたすべての方々に敬意を表します。ありがとうございました。



情報・バラエティ部門

『ケンボー先生と山田先生』
～辞書に人生を捧げた二人の男～



NHKエデュケーショナル／NHK BSプレミアム
ディレクター 佐々木 健一(NHKエデュケーショナル)
制作 統括 戸沢 冬樹(NHKエデュケーショナル)
高瀬 雅之(NHK)

ディレクター 佐々木 健一(NHKエデュケーショナル)

この度はたいへん過分な賞をいただき、誠に有り難うございました。国語辞書と編纂者についての番組というと、地味でマニアックな内容だと思われがちですが、見坊豪紀と山田忠雄という二人の偉大な編纂者の情熱と相克の物語は、単なる辞書作りの話を越えて、「ことば」というものを使わなければならない人間の、誰にでも当てはまる普遍的な物語であると捉えていました。それで二冊の辞書と二人の人生の歩みを一つのセットで展開させるアイデアを考え出したのですが、実はこうした演出となった本当の理由は、やりたいことに比べて予算が全然足りなかったからなんです…。お金がない中でどうしたらいいかを必死に考えて、まず紙に鉛筆と定規でセットイメージを自分で描き、スタジオ撮影もスタッフや出演者に無理をお願いしてたった2日間で撮り終えました。映像の合成についてもCGやインフェルノを使わず、全て編集マンがオフライン編集で合成作業を行ってくれました。予算も注目度も決して高くはない番組でしたが、今回、このような榮譽ある賞をいただき、スタッフ一同、とても励みになります。今後もテレビの新しい表現の可能性に向かって、励んでいきたいと思っています。





第30回ATP賞 審査委員長 金澤 宏次
(ユニオン映画・ATP副理事長)

《審査体制について》

昨年度に引き続き、審査委員長1名、審査委員9名(各部門3名)の計10名で臨んだ。昨年も参加した審査委員は1名のみで、9名が入れ替わった。評価に偏りが残らぬよう、ここ数年審査委員の顔ぶれは、毎回、大きく入れ替わっている。

この賞の基本コンセプト“創り手が選ぶ賞”らしく、ゴールデンタイムの第一線ヒットメーカー、また珠玉の実績を誇る大ベテランから地域のクリエイターまで、優れた見識を有する専門性の高い多彩なメンバーにお集まり頂いた。

内向きな価値観にとらわれず、新鮮かつ確かな眼差しで選考をお願いした。

《審査方法について》

最優秀賞3作品の選考内定は基本、各部門3名の審査委員に委ね、更に全員で検証を重ね決定した。理由は、各ジャンルの専門家が他ジャンルにも揺るぎない見識があるとは必ずしも言い切れない面もあり、やはり各部門の審査委員の評価を尊重した。

また、価値観が視野狭窄にならぬよう、『完成度』、『感銘・共感』、『充足感』、『視聴率』等々、多くの物差しを持ちつつ、議論を重ね、公正な審査に努めた。優秀賞、奨励賞審査に関しては、審査委員長も参加し、評価を盛り込ませて頂いた。ただし、受賞作品の本数に関しては、様々な制

約から当初より限定し、審査を進めた。

ここでは、優秀賞と奨励賞の差別化にも触れたい。奨励賞は優秀賞の次点ではなく、『挑戦』、『ターゲットを絞ったトライアル』、『個性』といった“ある視点”から評価する賞とした。

今回、地域のクリエイターからのエントリーも多く、結果、『個性豊かな視点』、『トライアル』といった評価の観点から、地域発の4作品が奨励賞を受賞した。

《審査総評》

テレビ60年を経て、企画のマンネリ化、演出表現の没個性化に襲われ、テレビ界全体が苦悩の日々を送っていると言っても過言ではない。古今東西、生き残る表現ジャンルは50年で成熟すると言われてきた。演劇、小説、映画しかり。各ジャンルを併せ持つテレビ表現が、その峠を越えて10年が経つということになる。テレビ表現が50年と言う峠から転がり落ちるのか、更なる高い峰を目指せるのか、正念場だ。

基本、テレビは各ジャンルが切磋琢磨し、より高い頂を目指し、グレードアップしてこそ成熟が深まるのではないかと。それでこそ、かつて先人たちが挑戦した“ジャンルの化合物”であるドキュメンタリードラマという表現も生まれてこよう。

今回、ドキュメンタリー、情報・バラエティ、この2部門で最

【ドキュメンタリー部門】

◆「零戦」 ～搭乗員たちが見つめた太平洋戦争～

太平洋戦争で戦闘の最前線に立ち続けた「零戦」の悲劇的な運命をあらゆる角度から検証した番組。特攻隊員・大黒繁男のドラマも効果的。印象深いのは、出動命令を下していた上官と、その家族の証言。死の強要への懺悔は没するまで続き、その長女は父に対し「死んで償うべきだ」と糾弾する。放送時、かの人が亡くなっていることも戦争の真実に迫る取材が時間との戦いであることを実感する。5年に及ぶ丁寧で丹念な取材が結実したテレビ放送60年にふさわしい大作。

【情報・バラエティ部門】

◆「ケンボー先生と山田先生」

～辞書に人生を捧げた二人の男～

この番組の企画書を読みたいと思った。企画書から、どれだけこの番組が想像出来るのか。一つのセットを縦横無尽に使い、圧倒的な視覚からの刺激と、それを癒すかの薬師丸ひろ子のナビゲート。他作品を寄せ付けないそれはそれは見事な世界観と完成度に感動です。視聴者に対する優しさも抜群!そう「見坊」は「ケンボー」と読むのです。見終えた後、息子の部屋に辞書を探しに行きました。

～観光庁長官賞～

◆春のドラマ特別企画「母。わが子へ」

昨年新設された2年目の賞です。“人と風土の出会い”、“風土に根ざした生き様”を文化・情報、また人間模様といった観点から描いた秀作に授与する賞。引き続き今回も、『頑張り!東北』の熱き思いが選考に加味される結果となりました。3部門のジャンルを越えてエントリーされ、選考される賞です。

優秀賞を受賞した2作品共に、“再現ドラマ”が多用されていた。審査委員たちは、これを「表現の幅を広げることに成功している」と、評価した。即ち、作品として混合物ではなく化合物足りえたとした。昨今の言葉を使えば、“化学反応”を起こしたということか。

ただし、これは危険な一面も併せ持っている。一歩誤れば、「安直な演出に逃げている」と言うことになる。何でもイイとこ取りするのがテレビだという考え方もあろうが、それでは表現ジャンルとしての進化、成熟は難しい。

今回、ドラマ部門にも重厚で完成度の高い数々の作品が寄せられた。偶然ではあるが、総務大臣賞、観光庁長官賞もドラマが受賞した。かつて映画界が衰弱していた頃とは打って変わって、日本の映画界が蘇ってきているなか、テレビドラマを演出する監督たちも、テレビ、映画といった世界を越え、双方のスキルを見事に身に付けてきている。是非、今後とも技量を研磨することのみに溺れることなく、原石という名の企画、脚本を生み出すことに、より労力を費やして行って頂きたい。

～最優秀賞～

【ドラマ部門】

◆水曜ドラマ「Woman」

～命をかけて我が子を育てるシングルマザー～

旧来より描かれていた普遍的な母親像だけでなく、多様化する現代の価値観を踏まえて、異なる立場の母親達を配置した点に、バランスのとれた制作者のセンスを感じる。やや強引な設定もあるが、それぞれの境遇にある人物達の心理描写が丁寧なので拭きできている。「お母さんの愛が欲しくて欲しくてたまらないのは女の方」「お風呂も御飯も電車も2人だと簡単にできる事が1人だと急に難しくなる」「男の犠牲にされることを母親って呼ぶんだ」など心に刺さる多くの台詞が、女優陣の熟演と相俟って秀逸なシーンが積み重なっている。

「第30回ATP賞」審査委員

- ◆審査委員長 金澤 宏次 (ユニオン映画)
- ◇ドラマ部門 中山 和記 (バンエイト) 佐野 奈緒子 (大映テレビ)
- 平部 隆明 (ホリプロ)
- ◇ドキュメンタリー部門
- 大 鋳 あゆり (伊万里ケーブルテレビジョン) 新山 賢治 (NHKエンタープライズ)
- 横山 隆晴 (近畿大学総合社会学部 教授)
- ◇情報・バラエティ部門
- 伊藤 慎一 (シオン) 荻原 伸之 (ジッピー・プロダクション)
- 工藤 浩之 (ケイマックス)

(敬称略、五十音順)



優秀賞・奨励賞の審査講評はATPホームページwww.atp.or.jpに掲載しております

優秀賞

ドラマ部門

WOWOW 連続ドラマW『レディ・ジョーカー』

東阪企画 / WOWOW プライム

プロデューサー
青木 泰憲 (WOWOW)
土橋 寛 (東阪企画)

監督
水谷 俊之 (フリー)
鈴木 浩介 (ハニーバニー)

原作
高村 薫

脚本
前川 洋一 (マツカンパニー)



ドラマ部門

金曜プレステージ特別企画『悪党』

テレパック / フジテレビ

編成企画
太田 大 (フジテレビ)

プロデューサー
黒沢 淳 (テレパック)
村上 研一郎 (テレパック)

監督
西浦 正記 (フジクリエイティブコーポレーション)

原作
薬丸 岳

脚本
戸田山 雅司



ドキュメンタリー部門

ザ・ノンフィクション『転んでも 転んでも』

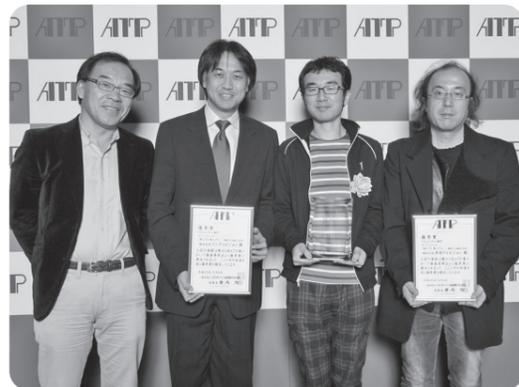
～三國清三の上海進出1000日～

共同テレビ / フジテレビ

チーフプロデューサー
味谷 和哉 (フジテレビ)

プロデューサー
西村 朗 (フジテレビ)
吉田 岳人 (共同テレビ)
後藤 博 (共同テレビ)

演出
花枝 祐樹 (共同テレビ)



ドキュメンタリー部門

BS1スペシャル『それでもジャーナリストは戦場に立つ』

日本電波ニュース社、
NHKグローバルメディアサービス /
NHK BS1

制作統括
茂木 明彦 (NHKグローバルメディアサービス)
川畑 和久 (NHK)

プロデューサー
上田 未生 (日本電波ニュース社)

ディレクター
櫻木 まゆみ (日本電波ニュース社)



優秀賞

情報・バラエティ部門

『YOUは何しに日本へ?』

～Why did you come to Japan?～

ジッピー・プロダクション、BEGIN、
テレビ東京制作 / テレビ東京

企画・総合演出
野村 正人 (ジッピー・プロダクション)

プロデューサー
本橋 由美子 (ジッピー・プロダクション)

演出
森 辰雄 (ジッピー・プロダクション)

ディレクター
水野 雅之 (ジッピー・プロダクション)



情報・バラエティ部門

THE MUSIC DAY『音楽のちから』

E company、エムファーム、オフィス・ケアール、
オリオンブルー、ゴッドキッズ、日テレアクセスオン、
モスキート / 日本テレビ

総合演出
江成 真二 (日本テレビ)

チーフプロデューサー
藤井 淳 (日本テレビ)

総合プロデューサー
高谷 和男 (日本テレビ)

プロデューサー
浪岡 厚生 (E company)
黒岩 敏一 (エムファーム)
本橋 武夫 (オフィス・ケアール)
大越 理央 (オリオンブルー)
藤本 弘志 (ゴッドキッズ)
森下 典子 (日テレアクセスオン)
長谷川 賢一 (モスキート)



奨励賞

ドラマ部門

テレビ西日本開局55周年記念ドラマ『めんたいぴりり』

ビデオ・ステーション・キュー (VSQ) /
テレビ西日本

プロデューサー
瀬戸島 正治 (テレビ西日本)
本田 克哉 (VSQ (ビデオステーションキュー))

監督
江口 カン (空気)

脚本
東 憲司 (劇団浅草童子)



ドラマ部門

プレミアムドラマ『ペコロス、母に会いに行く』

東北新社 / NHK BSプレミアム

演出
坂部 康二 (東北新社)

企画・プロデューサー
松井 奈緒子 (東北新社)

プロデューサー
堤 啓介 (NHK)

脚本
青島 武
原作
岡野 雄一



奨励賞

ドキュメンタリー部門

カンボジア・チィ先生『ありがとう!チィ先生』
～カンボジアの子供たちに夢と笑顔を～

イメージランド／北海道テレビ放送

プロデューサー

多田 健(北海道テレビ放送)

企画・演出

木下 丈寿(イメージランド)



ドキュメンタリー部門

ノンフィクションW『映画で国境を越える日』
～映像作家・ヤン ヨンヒという生き方～

放送映画製作所／WOWOW

制作統括

根津 千景(WOWOW)

プロデューサー

太田 慎也(WOWOW)

曾山 睦子(放送映画製作所)

ディレクター

富山 拓也(放送映画製作所)



ドキュメンタリー部門

『僕らに春は来るのか』
～シリア難民の子どもたち～

椿プロ、NHKエデュケーショナル／
NHK BS1

制作統括

金本 麻理子(椿プロ)

戸沢 冬樹(NHKエデュケーショナル)

塩田 純(NHK)

ディレクター

金本 麻理子(椿プロ)



情報・バラエティ部門

ダイードリンコススペシャル『厳寒!荒行!4つの魂。』
～木古内 寒中みそぎ祭り～

エイチ・ピー・シー・フレックス／
北海道放送

プロデューサー

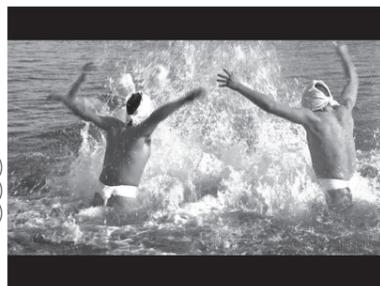
庄司 寛(北海道放送)

ディレクター

佐藤 大介(エイチ・ピー・シー・フレックス)

大川 雄司(エイチ・ピー・シー・フレックス)

神山 功(エイチ・ピー・シー・フレックス)



奨励賞

情報・バラエティ部門

『会いたい!世界エンキョリ家族』

IVS テレビ制作、共同テレビ、
ジョイマン／朝日放送

演出

野澤 尚弘、西川 竜介(IVSテレビ制作)

ディレクター

矢崎ゆうこ(IVSテレビ制作)

安達 敏春(共同テレビ)

武澤 貴之(ジョイマン)

チーフプロデューサー

上野 晴弘(朝日放送)

プロデューサー

西尾 理志(朝日放送)

福浦 与一、錦 信次(IVSテレビ制作)

中島 由布子(共同テレビ)

後藤 喜男(ジョイマン)

アシスタントプロデューサー

高橋 葉子(IVSテレビ制作)



特別賞

“土曜ワイド劇場”制作チーム

制作会社競作のドラマ枠として長年の放送実績に対して

栄誉あるATP賞・特別賞を、我々「土曜ワイド劇場」制作チームに授与していただき、感謝いたしております。「土曜ワイド劇場」の特徴として、競作システムがあります。90分枠でのスタート当初から、各制作会社の皆様方からオリジナリティ溢れる企画をご提案いただき、競争をしていただいているものだけが生き残る、ということを繰り返しながら、ここまで続いてきました。1979年の4月からは、朝日放送も加わり2時間枠となり、さらに局の担当者同士も競争しながらやってきております。現在、番組開始から37年目に入っておりますが、視聴者の皆様、そしてスポンサーの皆様の支持が得られる限り、続けていけたらと考えています。各制作会社の皆様方との「共存共栄」を目指し、さらに理想的なパートナーシップを追求していきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願いたします。

編成制作局 制作2部 ドラマ制作ゼネラルプロデューサー

高橋 浩太郎(テレビ朝日)

東京支社 制作部 ゼネラルプロデューサー

深沢 義啓(朝日放送)

プロデューサー 野木 小四郎(大映テレビ)



特別展京都“龍安寺石庭”4K映像制作チーム

4Kの可能性を大きく広げ、新しい美術展というカテゴリーで、画期的な映像表現に挑戦し、成功させた。その功績に対して

このたびは素晴らしい賞を頂戴しまして感謝申し上げます。テレビ制作のプロフェッショナルの皆様から、番組ではないこういう一種変わったコンテンツを評価していただいたことを、とても嬉しく、また誇らしく思います。京都・龍安寺石庭の四季を4Kで撮影し、実寸大でスクリーンに投射する。言葉にすれば実に単純なことなのですが、この実現には気の遠くなるような手間と技術と時間が必要でした。4台の4Kカメラを季節ごとに正確に同ポジションを取って撮影し、東京で寸分の狂いもなくマルチ合成する。この作業を春夏秋冬に渡って繰り返してきました。今回の受賞は、まさに“特別”なご褒美です。胸が一杯です。本当に、本当にありがとうございました。

事業局イベント事業部 担当副部長 プロデューサー

岩間 玄(日本テレビ)



新人賞



高橋 泰一
日本電波ニュース社
ディレクター
2008年入社

「イランは神が宿る国」でした。番組に出てくる、アパートの住人、幼馴染、墓地で出会った老人、すべての出会いが偶然だったからです。この番組は、サヘルさん、イランの人々の温かい心があって、初めて完成できた番組でした。

今回、ATP新人賞を受賞しましたが、撮影スタッフを含め、みなさんがいたからこそだと思っています。祖国への帰郷に密着させてくれたサヘルさん。いつも助けてくれたイランの人々。どうもありがとうございます。街並み、イラン人の営み、古くから受け継がれてきた伝統、すべてが魅力的な国でした。また、行きたいな。

ヘイリ マムヌーン!!!ホダーフェズ!!!



受賞作:旅のチカラ
「失われた故郷の記憶を求めて」
～ サヘル・ローズ イラン ～



小林 稔昌
クリエイティブネクサス
ディレクター
2006年入社

「30歳になる前に、やりたいことを1つ成し遂げよう!」『僕にはまだ友だちがいらない』は、僕の中にある熱い部分と呼び覚ましてくれた原作でした。それがスタッフ、出演者の方々のおかげで、たった5分だけ、かなりの熱量を持ったドラマになったと思います。脚本の安部さんは原作の良さを残しつつ、ドラマとして新しい世界観を構築してくれました。主演の浜野さん、芝居はもちろんのこと、毎回オリジナルソングを作ってくれました。「良い作品にしよう」とすべてのスタッフ、出演者が本気で取り組んだドラマです。制作できたこと、評価して頂いたこと、本当に感謝しております。でも、これはまだ第一歩。ATP新人賞を糧に、これからもっと熱量のあるドラマを作っていけるよう精進します。



受賞作:青山ワンセグ開発
「僕にはまだ友だちがいらない」



鈴木 亜希乃
日テレ アックスオン
プロデューサー
ディレクター
2011年入社

“いつか必ず、オリジナルでドラマを作る”——毎日ドラマばかり見ていた私の、小学生の頃から思い描いていた夢でした。そのためにAX-ONという会社に入り、好きなことが仕事になるということに、期待に胸を膨らませていました。しかし現実はその甘くなく、最初に配属されたのは情報番組でした。それでも諦めきれず、毎月数本企画を出し続けるも、それが通ることはありませんでした。50本ほど企画を書いて、その全てが駄目だった時、自分には才能がないんだと諦めようと思いましたが、その時に救ってくれたのが、テレビ業界への就職に一番反対していた父でした。言葉にすることはありませんでしたが、遠くから、私の作品が世に出ることを誰よりも願ってくれていました。そんな父に届けたいと思い、自分の素直な気持ちを綴ったのが、今回賞をいただいた「お父さんは二度死ぬ」という企画でした。世の中はつらいことばかりで、努力が必ず報われるという保証もありません。しかし「誰かに届けたい」「誰かと共有したい」そんな気持ちがある限りは、もう少しこの“テレビ”という不思議な世界で頑張れるのではないかと思います。この作品に関わってくださった全ての人に、抱えきれぬ感謝を込めて——。



受賞作:プレミアムドラマ
「お父さんは二度死ぬ」

新人賞審査講評

高橋 泰一(日本電波ニュース社 ディレクター)
「失われた故郷の記憶を求めて」の演出

サヘル・ローズさんは、わずか3歳の時にイラク軍の空爆によって両親と兄弟を失い、たったひとり生き残った。本作は、自分の本名すら知らない彼女が、祖国・イランで失われた記憶を探る旅。幼少期に過ごした養護施設や小学校の恩師を訪ねてゆくうちに記憶が少しずつ蘇り、彼女の眼差しが強く、そして、自信に満ち溢れてゆくの印象的だった。ナレーション過多との指摘もあったが、取材制約が多いイランでの撮影、さらに頼りになるのは彼女のかすかな記憶、という状況下での取材は困難だったと推測し、新人とは思えないその取材力の高さを評価した。

小林 稔昌(クリエイティブネクサス ディレクター)
「僕にはまだ友だちがいらない」の演出

孤独、劣等感、見栄、妬み。誰もが抱える負の感情を、絶妙のユーモアで描ききった。一人一人が番組のために用意されたキャラクターではなく、いきいきと生きており、互いの孤独を埋めようとする様や、それでもなおおすれ違ってしまうおかしみを見事に演出している。企画の制約を逆手にとり、わずか5分で人間のドラマを描

こうという挑戦に拍手。監督の思いを、スタッフとキャストが共有して生まれる幸福感にあふれた作品だった。

鈴木 亜希乃(日テレアックスオン プロデューサー、ディレクター)
「お父さんは二度死ぬ」のプロデュース

父親の謎の死をきっかけに、それまで知らなかった家族の秘密が明かされていくドラマ。ミステリーでありながら、心温まる家族の絆も描いており、見終わったあとにとっても優しい気持ちになれた。作品自体の面白さもさることながら、24歳という若さで自身のオリジナル企画をこまごまの作品に仕上げたプロデュース力は新人賞に値すると感じた。今回の受賞をきっかけにさらなる飛躍を期待したい。

「第30回ATP賞」新人賞 審査委員

- ◇伊東 亜由美(NHKエンタープライズ)2008年度ATP賞新人賞受賞
- ◇高城 朝子(テレビマンユニオン)2008年度ATP賞新人賞受賞
- ◇小坂 一之(クリエイティブネクサス)2010年度ATP賞新人賞受賞

(敬称略、受賞年度順)

総務大臣賞

『家族ゲーム』



共同テレビ/フジテレビ
編成企画
水野 綾子(フジテレビ)
プロデューサー
稲田 秀樹(共同テレビ)
小林 宙(共同テレビ)
演出
佐藤 祐市(共同テレビ)
岩田 和行(共同テレビ)
原作
本間 洋平
脚本
武藤 将吾

この度はATP賞総務大臣賞を賜り、大変光栄に存じます。審査員の皆様および関係者の皆様には深く感謝いたします。

当作品は、言わずと知れた本間洋平著の同名小説を下敷きにしており、過去にも映画やドラマで注目を浴びた名作のリメイク版です。閉塞した世界に異物が入り込むことによって同時代の家族や教育の問題を浮き彫りにした手法は、現代を描くことにも通用するのではないかと考え、企画を推し進めました。

この作品ではテレビドラマとしてはタブーとされることにたくさん挑戦しています。初回からして番組冒頭から数分間まったく会話のないシーンで始まったり、時に音楽もなくセリフもなく主役すら出て来ないままオープニングが終わったり、CMも入らず30分のシーンが延々続いたり…と前例のない試みがなされています。今どき珍しい独立したエンディングにもこだわりま



した。これもまたテレビドラマという閉塞状態に追い込まれた世界に何とか異物を投げ込みたいという意識が働いたのかもしれない。

今回は、そんな「不良」な作品をきちんとドラマとして「正当」に評価して頂いたことを心から嬉しく思い、今後の制作活動へ大いなる希望と勇気を与えてくださったのだと受け止めています。

最後に、こんな無謀な試みに果敢に挑まれた脚本の武藤将吾さん、演出の佐藤祐市、岩田和行、そして音楽で盛り立てて下さった本多俊之さん、すべての制作関係者に謝意を表したいと思います。

プロデューサー 稲田 秀樹(共同テレビ)

観光庁長官賞

春のドラマ特別企画『母。わが子へ』



メディアミックス・ジャパン/
毎日放送
演出・プロデューサー
竹園 元(毎日放送)
プロデューサー
深迫 康之(毎日放送)
布施 等(メディアミックス・ジャパン)
脚本
井沢 満

素晴らしい賞をいただき、光栄です。ありがとうございます。毎日放送の竹園さんと初めてご一緒させていただいたのが2012年に放送した、聴覚障害を持つ娘の結婚にまつわる父と娘を描いた「花嫁の父」と言うドラマでした。そして脚本の井沢満さんをはじめとしたそのチームで制作したのが本作「母。わが子へ」であります。このドラマには警察も刑事もパトカーも一切できません。出てくるのは一台のキャンピングカーだけです。これといって大きな事件が起こることもなく、一路、家族



の故郷の思い出の地である松島を目指します。但しそこには、息子を思う母と母を思う息子の気持ちがいつまでもつづいています。東京から松島までの美しい風景もさることながら、その人々の思いの綺麗さ、美しさが全編に漂う作品になったと思っております。これからも、何気ない日常の中での人々の営みを丁寧に描く、温かくて、人の心にじわっと響くような作品を作り続けていきたいと思っております。

プロデューサー 布施 等(メディアミックス・ジャパン)